

1. 過去を記録する泥

現在の琵琶湖は40万年以上の間、湖として存在しつづけていると考えられています。長い間、湖でありつづけた琵琶湖が育み、残してきたものは、多くの固有種だけではありません。意外かもしれませんが、湖の底にたまった泥も琵琶湖が残したもう一つの宝ものなのです。

琵琶湖の底には、現在の場所に湖ができてからの連続した泥の堆積物が残されています。北湖の南湖盆でのボーリング調査から、湖の底に約250mもの泥が存在していることが明らかになっています。この泥の中には、過去の環境を記録している、花粉や珪藻などの微化石が無数に保存されているのです。

2. 花粉が語る森の変動

琵琶湖の湖底に残された泥の中の花粉化石の研究から、琵琶湖周辺での森林の変遷について多くのことが明らかになってきています。

現在の琵琶湖にたまっている湖底表面の泥の中の花粉を調べると、高木花粉の60%程度をスギ花粉が占めています。これは、現在の琵琶湖周辺には、スギの人工林が多く存在しているためです。しかし、2万5千年前頃に堆積した泥の中には、スギ花粉はほとんど見られず、ゴヨウマツやトウヒ、ツガの仲間などのマツ科針葉樹の花粉が優勢になります。この時代は、世界的に氷河が発達した寒冷期であり、琵琶湖周辺でも今では高い山にしか生育しない樹

木が優占していたことが明らかになってきました。

縄文時代の終わり頃から弥生時代にたまった泥の中からは、ドングリをつくる木であるカン類やスギの花粉が多く見つかります。当時の人びとは、カン類のドングリを食べたり、スギをつかって丸木舟をつくったり、様々な形で森を利用してきたことも、考古学の研究によって明らかになっています。

琵琶湖が残してきた泥の堆積物は、過去の環境変動を記録した、世界的にも貴重なタイムカプセルなのです。



写真T-1
琵琶湖堆積物からみつける花粉化石
(白線は10 μ m)

琵琶湖博物館 林 竜馬